

論文の和文要旨

論文題目	フランス語の副詞的形容詞について： コーパスデータに基づくスキーマ化の試み
氏名	関 敦彦

1. はじめに

現代フランス語において形容詞から副詞的語彙を派生する場合、形容詞に接尾辞-ment を付加することが一般的である。しかしながら、一部の形容詞は接尾辞を伴うことなく副詞としての機能を果たすことができる。本研究ではこれらの語彙群を副詞的形容詞(以下 AA : Adjectif adverbial)と呼ぶ。また AA が動詞の右方に出現する表現を[V + AA]表現と呼ぶ。AA は主に動詞に後置され、動詞の数量や様態を示す機能を果たしている。

2. AA の特徴

通常、フランス語の形容詞には付加的用法と属詞的用法という 2 種類の用法が見られる。また、どちらの用法で使用される場合でも形容詞は修飾する語の性と数に一致することがよく知られている(例文 (1)と(2))。一方、副詞的な用法で使用される AA は、共起する語に関わらず多くの場合で不変化で出現する(例文 (3))。

(1) Je connais un circuit touristique *intéressant*, dit-il en sortant un papier de sa poche.

「私は面白い観光ツアーを知っています。彼はポケットから紙を取り出しながらそう言った。」

(QUENEAU Raymond, Le dimanche de la vie, 1951, p.166)

(2) Je me demande pourquoi Pontevin ne rend pas publiques des idées si *intéressantes*.

「ポントゥヴァンがなぜとても面白い考えを公にしないのか私は疑問に思っている。」

(KUNDERA Milan, La lenteur, 1995, p.33)

(3) Degrelle, (...), avait pensé que son rôle politique lui vaudrait ses galons d'officier, mais la Wehrmacht avait refusé *net*: pas d'expérience.

「ドゥグレレルは自分の政治的役割が将校の地位にふさわしいと考えていたが、ドイツ国防軍(Wehrmacht)は経験のなさを理由にきっぱりと拒否した。」

(LITTELL Jonathan, Les Bienveillantes, 2006, p.219)

また、AA には語彙的統語的な観点から制約が課されていることを指摘できる。まず、AA として使用可能な語彙は限られている。特に生産性の高い語は、本研究でも扱う fort や haut、bas など基礎的な意味を示しており、かつ形容詞としても使用頻度が高い語である。このため、AA は同義語による置き換えが困難である場合が多い。例文(4a)では payer (支払う)と cher (高い)のペアが「高い金額を支払う」という意味を示しているが、cher を同義語である coûteux (高価な)で置き換えると容認されなくなる(例文 (4b))。

(4a) (⋯) rendre service au personnel, c'est en particulier le payer *cher* pour un travail réduit.

「従業員に貢献すること、それはとりわけ少ない仕事に対して高い給料を支払うことである。」

(WILBOIS Joseph, Comment fonctionne une entreprise, 1941, p.5)

(4b) *(⋯) c'est en particulier le payer *coûteux* pour un travail réduit.

統語的な観点として、AA は多くの場合で動詞の右方に出現することが指摘できる。一般にフランス語の副詞は出現位置が相対的に自由であることを考えると、副詞としては例外的な現象であることがわかる。具体

的な制約の 1 つとして分裂構文による左方転移が困難であるということがいえる。副詞は一般的に *c'est...que* という構造によって移動させることが可能だが、例文(5)ではそのような操作が容認されないことが示されている。

(5) **C'est cher que Paul a payé cette erreur.*

「ポールがその失敗に払ったのは大きなつけど。」

(Abeillé et Godard 2004 : 214)

このように[V + AA]表現は様々な制約が伴っており、慣用句的な要素を持った表現である。一方で、一定の生産性も伴っており、したがって文法的な性質も持ち合わせているといえる。本研究でも扱うが、*fort* には 550 語の動詞と共起することが確認されており、動詞の意味も様々である。また、出現頻度が少ないため確実に容認されるか不明確である、つまり新奇表現を成す動詞と AA のペアも存在する。さらに、くだけたレジスターや広告のキャッチコピー等の分野では AA として使用可能な語彙のバリエーションが大きく、新たな表現が産出されていることが指摘されている。

3. 本研究で援用する理論

本研究では、認知言語学の一分野として近年盛んに研究が進められている構文文法理論を採用する。この理論の大きな特徴として、語彙と統語の間に明確な境界線を設けないことが挙げられる。構文文法は「構文」と呼ばれるユニットを言語の基本的な単位として想定している。このユニットは意味と形式の対によって成り立っており、従来から存在する語の概念と同様に定義づけられている。しかしながら、この概念は語のみならず接辞や複合表現、構成性の低い慣用句的表現なども含んでいる(表 1 参照)。

表 1：構文と考えられる要素

構文の種類	例
形態素	pré-, super-, -able, -ant, -ment
語	table, mot, donner, avec, joli
複合語	pomme de terre, mot-clé, sous-titre, portefeuille
慣用句	tout de suite, et ainsi de suite, battre le pavé
抽象的な構文	NOUN ¹ VERB NOUN ² à NOUN ³ , espace NOUN (cf. 古賀 2020)

さらに、構文文法では具体的な音声のみならず、[NOUN¹ VERB NOUN² à NOUN³]のような具体的な語彙が欠如した抽象化された存在も形式として想定されている。さらに、抽象的な形式にもなんらかの意味を付与することができると考えており、その結果として文法構造も語彙と同様の枠組みで捉えなおすことができる。なお、抽象的な構造は話者が多くの具体事例、なかでも類似点を持ちつつも部分的に異なる複数の表現群を経験することで、それらの共通性をもとに産出されていると考えられている。逆にいえば、抽象的な構文からは様々な具体事例を産出することができ、したがって生産性の高い構文であるといえる(図 1 参照)。一方で語彙のような具体的な構造は生産性が低く、また形式と意味の関係性が恣意的であり、固定された構造であると考えられる。これらの点を踏まえると、構文文法理論において語彙と統語は明確に分離された概念ではなく、生産性や意味的な構成性を基準にした連続体的な概念として捉えなおすことができる。

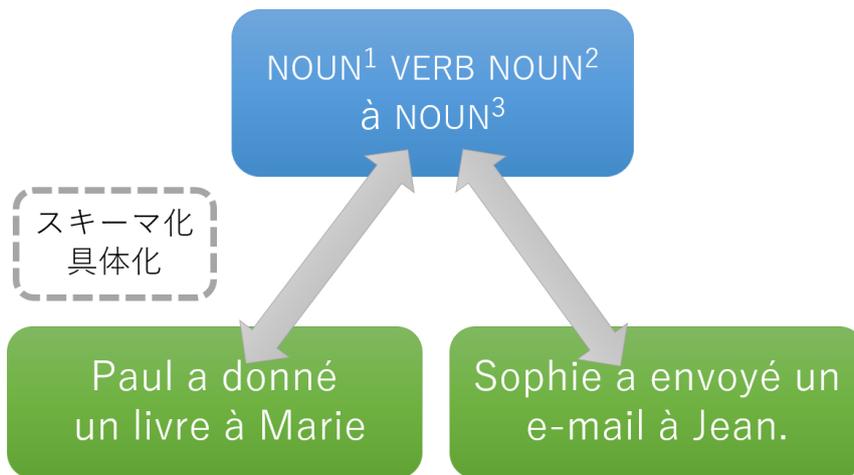


図1：具体事例のスキーマ化とスキーマに基づく事例化

本研究で扱う[V + AA]表現は上記のように語彙的統語的な制約がありつつも生産性を持っている。つまり、語彙と統語の境界上に存在する表現群であるといえる。そのため、語彙と統語を明確に分離することなく言語現象を扱うことができる構文文法理論の援用は本研究の分析にとって適切であると考ええる。

4. 本研究の目的と意義

本研究で扱うAA(副詞的形容詞)はその名が示す通り、副詞と形容詞の境界的な位置に存在する語彙群である。また、現代フランス語においてAAの使用は相対的に頻度が低く、特に語彙のタイプという観点では周辺的であるといえる。これらの要因により、AAの研究はフランス語学においてあまり重視されてこなかったといえる。

上述したように[V + AA]表現は様々な制約がありつつも生産性も同時に存在し、二面的な性質を持っている。本研究ではGoldberg (1995)等が展開した構文文法の理論を援用し、実際の事例を観察することで[V + AA]表現の産出原理を明らかにする。

分析対象として、[V + AA]表現の中でも比較的生産性の高いと考えられるものを選択した。具体的に述べると、Hummel et Gazdik (2021)で共起するAAのタイプが最も多いと記述されていた動詞5語(*écrire*、*parler*、*vivre*、*sonner*、*faire*)、同じく共起する動詞のタイプが最も多いと記述されていた形

容詞 5 語(fort、haut、bas、droit、dur)をコーパス上で調査した。使用したコーパスはフランス語で執筆された文学作品のデータが主に収録された Frantext を使用した。文章のジャンルによって使用に差異が見られる可能性も考慮して、コーパスデータの中でも最も収録語数が多い小説(Roman)のジャンルに限定した。さらに、本研究は現代フランス語の使用を対象とすることから 1950 年から調査時点での最新データである 2021 年にかけての作品を扱った。

現代フランス語の[V + AA]表現に関して、構文文法の観点を援用した上で、コーパスデータを基に量的、質的両方の側面から実際の使用の記述を試みた研究は見当たらない。この点の不足を補うことに本研究の意義があると考えられる。